角川学芸出版
2,100円（税込）

風雅と官能の室町歌謡
―五感で読む閑吟集

植木朝子（大学文学部教授）著

『閑吟集』は、室町時代後半に流行し、広く愛唱された歌謡・小歌を集めたものです。「世の中はちろりに過ぐる　ちろりちろり」と、この世の無常を見つめる歌があり、一方に「何せうぞくすんで　一期は夢よ　ただ狂へ」と、現世享楽を勧める歌があります。はたまた「あまり言葉のかけたさに　あれ見さいなう　空行く雲の速さよ」と、純情な恋を歌うものもあります。突出した個性によって作られた作品を高く評価する近代の「文学史」においては、集団に支えられた歌謡というジャンルは軽視されがちですが、流行歌謡の詞章を読むことで、私たちは当時の人々の生き生きとした感情や日常生活のあり方を掬い上げることができます。本書では、小歌の世界を五感で味わえるようにとの意味を込めて、味わう・触れる・嗅ぐ・聴く・視るの各部を設けました。青梅は恋の味、寝肌を争う姉妹の物語、打つことをめぐる倒錯した官能の世界、薫物の香りが呼び覚ます恋の思い出、残り香のように纏わる恋人の面影、一節切尺八の音が喚起する悲しい恋の物語、唐櫓の響きから連想される遊女の恋、花筏・花車などの美しい文様と小歌の関わり、水車の回転が表現する無常観、燕や蛤が作り出す仏教的な世界と現世享楽……。本書では主に『閑吟集』に収められた小歌を読みながら、そこにあらわれた多様な世界を紹介しています。この小さな一冊が、室町小歌の豊饒な世界への入り口となれば幸いです。

著者より

ミネルヴァ書房
2,625円（税込）

住民と創る地域包括ケアシステム
―名張式自治とケアをつなぐ総合相談の展開

永田祐（大学社会学部准教授）著

現在、長期ケア政策においては、専門職だけでなく、地域の力を統合した地域包括ケアシステムを構築していくことの重要性が強調されている。しかし、そのためには、住民を機能として「活用する」だけでなく、住民と「協働する」ことが重要であり、地域の流儀に合った協働の「かたち」をそれぞれの地域で創り出していく必要がある。本書は、三重県名張市で当事者の人々と協働で取り組んだ実践を通して、その方法を明らかにしようとしたものである。

本書の構成は以下の通りである。第1章では先行研究を検討し、第2章では名張市の地域包括ケアシステムの概要と特徴を明らかにした。続く各章では、名張市で概ね小学校区ごとに設置されている「まちの保健室」と呼ばれる地域包括支援センターのブランチにおける日々の実践を検証することを通じて、身近な総合相談窓口に求められる機能や役割（第3章）、小地域福祉活動との関係のあり方（第4章）、「まち保」による見守り活動の方向性（第5章）等を明らかにした。

本書の特徴の一つは、地域住民を含めた当事者と研究者によるアクションリサーチの成果であるという点にある。筆者は外側から観察するのではなく、実践を変えるために何ができるか一緒に考え、実践してきた。各地で積み重ねられている「ローカルな実践知」の中にこそ新しいイノベーションのヒントがあり、それを当事者の人々とともに明らかにしていくことが社会福祉学の重要な役割だと思う。

著者より

日本経済新聞出版社
1,470円（税込）

経済学者に聞いたら、ニュースの本当のところが見えてきた

日本経済新聞社編
浦坂純子（大学社会学部教授）他著

日本経済新聞で2012年秋から連載された11名の経済学者の手による「ニュースを読み解くやさしい経済学」の単行本化である。内容は連載時とほぼ同じだが、イラストや用語解説が加わって、より分かり易くなっている。

「やさしい経済学」は日経でおなじみのコラムだが、「やさしい」と謳っている割には難解という定評があるため、今回の連載では「ですます調」を用い、就活学生が満員電車で読んでも理解できる内容を目指した。そのため、著名な執筆者であっても

いつもと勝手の違う努力を強いられたと聞いている。

初心者マークの筆者は、なおのこと苦労した。担当したのは「第10講雇用の話」である。連載時期が3月だったので、アベノミクスや春闘絡みで連日ニュースが動き、そのたびに書き直しを迫られた。詳しく書きたいと思えば思うほど字数の壁に阻まれ、何かを加えれば何かを削らなければならず、文章が崩れがちになる。その日の原稿を、締め切りである前日の18時ギリギリまで修正する重圧に、何度負けそうになったことか。

連載では雇用全般を扱う必要があったので、専門外の女性労働や最低賃金、派遣労働等についても見直せたのは良い機会であった。11講を通じて、特定の見解や政策に与するのではなく、身近なニュースが経済学ではどのように解釈できるのかが示されている。「こうするべき」という思い込みから脱却して、「こんな考え方もある」という議論の出発点を提供できたのではないかと思う。

浦坂純子

東京大学出版会
6,090円（税込）

東アジアとアジア太平洋
―競合する地域統合

寺田貴（大学法学部教授）著

本書のタイトルにある東アジアとアジア太平洋は、単なる地理上の位置を示すものではない。それらは現在、日米中という大国の政治的、経済的利益を実現するための思惑と行動がうごめく戦略的地域としての意味合いを持つ。本書はこれら大国が利益実現のために相互に競争し、時には中小国の懐柔をも辞さないその過程を克明に描いている。例えば、世間をにぎわせたTPP（環太平洋経済連携協定）をなぜ米国が推進し、日本がその参加を切望し、その一方でなぜ中国がその動きに警戒感を示したのかについて、本書の読者は明確な解を得るであろう。

筆者は、国家の外交政策指針は大国の意向によって形成される国際（地域）構造に大きく影響を受け、その影響力の源泉は、大国の国内政治過程の分析により示すことができるといった「新古典派現実主義」という理論的立場をとっている。本書の意義は、アジア地域統合における大国間競争という新たなケーススタディにより、この理論的立場の有効性を高めたといえよう。

筆者は、同志社大学を卒業後、豪州を皮切りに東南アジア、米国、英国で研鑽を積み続けてきた日本では数少ない「国際派」の国際関係学者である。これまで主に英語で出版されてきた筆者の論考は、多くの海外の研究者に引用され高い評価を得てきた。日本語による本書の出版により、研究者のみならず諸学生もその知見に容易に接することが可能になったことを門下の一人として大変嬉しく思う。

三浦秀之（杏林大学総合政策学部専任講師）

河出書房新社
1,365円（税込）

宗教と学校

橘木俊詔（大学経済学部特別客員教授）著

宗教系の学校（高校）が大学進学やスポーツで好成績を示していることには気付いていた。そこで日本で宗教系の学校がどれほどあるかを調べてみると、小・中学校は非常に少なく、高校で7％、大学で22％という比率だった。では宗教系といっても、仏教、神道、キリスト教、新興宗教などいろいろあるが、驚くべきことにキリスト教系が約3分の2の多数を占めている。日本人でキリスト教信者の人は全人口の1％くらいしかいないところに、キリスト教系学校の圧倒的なプレゼンスの高さである。

これまで述べたことを調査したいために書いたのが本書である。具体的には、(1)なぜキリスト教系学校が圧倒的に多いのか、さらにカトリック系よりもプロテスタント系の学校の数が多い理由はどこにあるのか、(2)なぜ宗教系の学校は進学やスポーツで強くなろうとするのか、(3)一部の学校を除いて宗教系の学校で学ぶ生徒の大半は宗教に無関心であるが、学校はそれにどう対応しているか、(4)戦前にあっては神道が国家主義の中で重宝されたが、他の宗教系（特にキリスト教）の学校はどのような苦労をしたか、(5)今後の宗教系学校の進む道、などを議論した。

同志社もキリスト教主義の学校なので、参考になれば幸いである。

著者より

晃洋書房
3,150円（税込）

マクロ金融経済の基礎理論

藤原秀夫（大学商学部教授）著

本書は、マクロ的枠組みの下での貨幣と銀行信用の基本問題を取り扱っている。その基本問題とは、貨幣供給と銀行信用の等価性を制約としてマクロ信用創造モデルを、均衡モデルおよび不均衡調整モデルとして整合的に定式化することである。そして、本書では、その理論モデルに基づいてマクロ金融経済が理論的に分析されている。

金融経済には、その制約に加えて、交換方程式（数量方程式）、ワルラス法則、の三つの制約がある。金融経済の経済現象はこの制約の下に生起している。その理論的分析には、これらの制約が十分に考慮されなければならない。本書では、そのことを随所に実践して見せている。第2章、第5章、第6章などである。

本書の核心は第6章であり、マクロ一般均衡モデルに基づいて分析される。第3章～第5章が伝統的な部分的信用創造モデルの精緻化に充てられ、第6章では、この部分的な信用創造モデルを均衡同時決定モデルに結合する方法として、標準的な方法と著者独自の方法が共に検討されている。後者は、民間銀行の預金供給に関する預金需要への受動的行動態度である。それらの方法が、均衡同時決定モデルの不均衡調整モデルを特徴づけることになることが本書の主張である。理論モデルとその分析では、類書とは異なり、常に証券市場に注意が払われる。この点が本書の重要な特徴の一つである。

著者より

晃洋書房
2,310円（税込）

コールドチェーン

森隆行・石田信博〈大学商学部教授〉・横見宗樹 著

経済が成長し、人々の所得が増加している東南アジアを中心とした新興国では、より新鮮な食材や冷凍食品を求めるようになり、食文化にも変化が表れてきた。生産地から消費者まで鮮度を保持したままで食品を流通させるためには、一貫した温度管理を可能にする低温物流システム、すなわち「コールドチェーン」の構築が必要となる。

一方、回復しない景気と少子高齢化により市場が縮小する日本では、企業の海外進出が加速した。以前は国内産業と考えられていた消費産業、ラーメン店や居酒屋などの外食チェーン、そしてスーパーやコンビニの新興国への進出も急増している。

新興国における食文化の変化やそのような産業の進出は、コールドチェーンに対する需要をますます拡大させる。現在、コールドチェーンは食品だけにとどまらず、医薬品、化学品、電子部品、生花など、さまざまな製品物流において求められ、生活を支えるうえで不可欠な社会インフラとなっている。

しかし、コールドチェーンの需要が高まる新興国においては、インフラとしての整備は始まったばかりであり、認識も十分ではない。他方、コールドチェーンが整備されている日本においては、コールドチェーンに関する実務書はあるが、理論書は見当たらない。この数年、タイと日本の研究者と共に研究を進める中でそれに気付き、コールドチェーンの理論的入門書が必要との認識の下で、本書は執筆された。

石田信博

有斐閣
1,995円（税込）

日本のジェンダーを考える

川口章〈大学政策学部教授〉著

「ジェンダー」とは性別のことである。わが国は、先進国のなかでは、最も性役割がはっきりしている国の一つである。男性は家事労働の一割程度しか行っていない。大半の先進国では、3割以上の家事労働を男性が担っている。他方、女性の社会進出は著しく遅れている。世界経済フォーラムが毎年発表している男女平等ランキングによると、2013年の日本の順位は世界136カ国中105位である。政治やビジネスの世界における女性の活躍が劣っていることが、わが国の順位を大きく下げている。

本書は、進学、就職、キャリア形成、結婚、出産など、人生の岐路に立つとき、性役割が私たちの選択にどのような影響を及ぼしているかを議論する。性役割それ自体には合理性がないが、経済構造と社会規範が、性役割に従うよう私たちの行動を制限している。

大学では、家政、教育、保健など、資格を取れる学部やケア労働に就きやすい学部に女性が多く、男性は工学、社会科学など企業や官庁に就職しやすい学部に多い。終身雇用慣行の強い企業ほど、男性が優遇され、女性は活躍できない。低所得の未婚男性は結婚しにくく、逆に高所得の未婚女性は結婚しにくい。出産退職した女性は、正社員として企業に復帰することはほとんどない。このような事例の背後にある、性役割の経済構造と社会規範を明らかにし、その変革の可能性を考える。

著者より

法律文化社
2,520円（税込）

京都の地域力再生と協働の実践

新川達郎〈大学政策学部教授〉編

農山漁村であれ大都市中心部であれ、人々が暮らすそれぞれの地域は、少子高齢化とともに社会と経済における規模と機能の縮退あるいは縮小と言われる状況に直面している。こうした問題状況に対して実際に地域にあって何ができるのか。

いま、住民自身が、地縁団体、ボランティアグループ、NPO、事業者、行政など様々な組織とともに、地域を支えるべく働き始めている。そうした諸活動に注目するとき、地域には大きな潜在力があることがわかるが、その一方では、それらが引き出されず、うまく使われていない現状にも気づかされる。

本書は、そうした地域が本来持っている力の再生を協働の実践の中で成し遂げようとしてきた京都の事例について、その理論、政策、制度そして実践の現在をまとめたものである。理論的には地域の新しいガバナンスの中で協働の課題をとらえ直しつつ、政策的には京都府の地域力再生施策の考え方や成果を明らかにし、制度としてのNPOパートナーシップセンターの設置の意義と効果を論じ、さらには、京都府北部を中心とした地域住民やNPOの地域づくり実践、また地域・大学・行政の連携やそれによる地域人材の養成を素材に、地域力発揮の実践とその課題を論じている。

本書は、京都の地域課題に深くかかわる著者たち、すなわち府の施策を担当する職員やそこに関心を持つ研究者の参加を得て、地域力再生に向けた現場からの自治の挑戦を問いかけたものである。

著者より

日本経済新聞出版社
872円（税込）

組織を強くする人材活用戦略

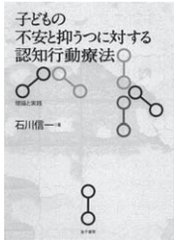
太田肇〈大学政策学部教授〉著

産業界におけるわが国の凋落ぶりが著しい。国内総生産、労働生産性、国際競争力などいずれの指標を見ても1990年代から世界での順位が急低下している。そして、日本を代表する大企業が軒並み経営不振に陥っている。また恒常的な残業や有休取得率の低さとは裏腹に、日本人の仕事に対する意欲は他国に比べて低いことが判明している。

こうした逆境の背景には、工業化社会からポスト工業化社会へという大きな潮流がある。そこでは仕事内容、求められる能力・意欲の大転換が起きている。IT革命やソフト化、グローバル化が本格化した90年代に米国、中国、韓国などの代表的な企業は、新たな環境に適応するため組織とマネジメントを大胆に改革し、躍進を遂げた。それに対して日本企業の多くは、周辺部分の切り離しと本体部分のマイナーチェンジで乗り切ろうとしてきた。そのツケが今、回ってきているのである。

日本企業に必要なのは、個人の能力と意欲を最大限に発揮させ、それを統合する新たな枠組みをつくることである。ポイントは組織の「分化」、社員の「自立」、縦方向の「単純化」と横方向の「複雑化」、そして「開放」の五つであり、頭文字をとってDISCOと呼ぶ。組織の理論・研究成果に先進事例を盛り込みながら、日本企業復活への道筋を示した。企業だけでなく役所や非営利組織などにも応用できるはずである。

著者より



金子書房
3,150円（税込）

子どもの不安と抑うつに対する認知行動療法
―理論と実践

石川信一（大学心理学部准教授）著

子どもたちの未来を照らす「心理学」という名の科学

意外に思われるかもしれないが、実は、子どもも大人と同じ様に不安やうつに思い悩む。彼らは、教室で手をあげることをやめ、友達と外で楽しく遊ぶことを避け、部屋の隅で自信なくうつむくようになるかもしれない。そこで著者は、心理学という「科学」に注目した。子どもたちの不安とうつは和らげることができるのである。本書には、子どもたちの不安とうつを和らげ、彼らに子どもらしい明るい未来を提供するための科学的な情報（エビデンス）が詰め込まれている。

特に注目したいのが、著者が実際に子どもたちを対象に実践している「いっちゃが教室」との愛称をもつ認知行動療法プログラムである（〝いっちゃが〟とは、宮崎のことばで〝いいよ〟という意味）。本書では、いっちゃが教室の治療効果を具体的な数字で示すことはもちろん、これをどのように実施するかが詳細に書かれている。これは、カウンセラーや治療の実際を知りたい読者にとっては大変ありがたい。

本書は子どもたちの未来を照らす〝Made in Japan〟の研究成果なのである。専門家はもちろん、学生やお子様をお持ちの方々まで、多くの方に手にとっていただきたい。

なお、著者は同志社大学心理臨床センターにおいても同教室を開催しており、京都での更なる発展にも期待したい。

三田村仰（京都文教大学臨床心理学部専任講師）

明石書店
2,100円（税込）

新時代アメリカ社会を知るための60章

落合明子（大学グローバル・地域文化学部教授）他編著

アメリカ合衆国（以下「アメリカ」）は、その影響力に陰りが見えるものの、超大国であることに変わりはない。特に日本との政治的・経済的な結びつきは強く、アメリカ文化も日本に広く浸透している。とはいえ、「自由の国」「人種のるつぼ」といった表面的な知識以上に、私たちはアメリカのことをどの程度知っているだろうか。

２００１年の同時多発テロ事件以来、アフガン戦争・イラク戦争、リーマンショックなどに起因する難題が山積する一方で、08年に「黒人」大統領が誕生し、アメリカは新たな局面を迎えている。本書では、そうした最新事情を知るうえで有益と思われる60のトピックを厳選し、分かりやすく解説した。タイトルに付した「新時代」という言葉と表紙の写真には、「アメリカの今」を伝えたい、という執筆者の想いを託した（写真では、オバマ大統領が、自由の理念を掲げ、国家の分裂を回避したリンカン大統領を奉る記念堂前で様々な人種の人々と歓談）。

取り上げたトピックには、政治・外交・経済分野では「２０１０年国勢調査」「保守主義の現代的展開」「21世紀の米中関係」「現代学資ローン事情」、社会分野では「スポーツと人種」「卓越する女子大学のグローバルな取り組み」「フクシマの危機と米国の対応」、文化・宗教・思想分野では「ラップ音楽における第三の波」「進化論論争再燃」「火葬の普及」などがある。アメリカへの留学、旅行、出張前に、ぜひご一読頂きたい。

著者より

ミネルヴァ書房
2,940円（税込）

グローバル・ジャスティス
―新たな正義論への招待

内藤正典（大学グローバル・スタディーズ研究科長）・岡野八代（大学グローバル・スタディーズ研究科教授）編著

本書は、同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科が設立された２０１０年以降、現在も連続して開催し続けている、市民の方にも開かれた連続セミナー「グローバル・ジャスティス」での講演をもとに、当研究科の教員が執筆した論文を主に編んだ論文集である（連続講座の内容については、研究科HP http://global-studies.doshisha.ac.jp/research/seminor.htmlを参照されたい。２０１３年12月現在で第40回を迎えた）。

政治学・法学の分野におけるメイン・テーマとして、〈正義に適った社会とはどのような社会か〉を巡り多くの哲学者たちが正義論を積み上げてきた。本書は、そうした議論を紹介することで正義論へと読者を導こうとするものではない。むしろ、正義に関するわたしたちの意識がどのような社会認識や歴史認識から沸きあがってくるのか、正義論の扉を開く前に、現在の日本社会で論じるべきこと、論じることのできることとは何かについて、まず考えてみようというのが趣旨である。

「世界認識／歴史認識」と「正義の諸理論」という二部構成となっているが、本書全体で試みたのは、地球大の正義という、なんとも壮大に思えるテーマは実は、わたしたち一人ひとりの無知や、偏狭さや、常識、そして既存の政治状況への満足（と不満）と密接に関係していることを、さまざまな事例から読者に語りかけることである。

岡野八代

日本キリスト教団出版局
1,365円（税込）

信仰生活の手引き
礼拝

越川弘英（大学キリスト教文化センター教授）著

著者の越川弘英さんは、過去四半世紀にわたって多くの礼拝関係の著作物を翻訳、また執筆してきたが、本書はその知識と思索と経験をもとに書かれた礼拝の入門書である。基本的に一般信徒を対象としたシリーズの一冊なので、コンパクトで読みやすいが、同時に深い洞察に支えられ、多くの示唆を提供してくれる。現時点での著者の礼拝に対する理解のエッセンスがここにあると言えるだろう。

キリスト者にとって礼拝は最も基本的な信仰的行為であるが、その意味や目的についてあらためて考えることはあまりない。それは信仰者にとって礼拝が生活の一部となっているからかもしれない。そのような中で礼拝の意味を問い続けることで、礼拝はさらに意義深く豊かなものとなるはずである。本書は礼拝を「遊び」にも似たような、生ける神との喜びに満ちた出会いの体験としてとらえ、論議を進めていく。そして著者が本書を貫いて語るのは、礼拝は「神の愛のわざ」であるということである。

著者は本書の中で、40冊近い日本語で読める礼拝関連書籍からの文章を意識的に引用している。そこには、自身の狭い理論に閉じこもることなく、さまざまな考えを紹介し、それらを総合し、整理するという著者の意図が感じられる。読者はそれらの書籍からさらに学びを広げていくことができるだろう。キリスト教の礼拝について学びたいと考える人には、まず最初にお勧めしたい一冊である。

小栗獻（日本基督教団神戸聖愛教会牧師）

新泉社
1,575円(税込)

シリーズ「遺跡を学ぶ」091

「倭国乱」と高地性集落論

―観音寺山遺跡

若林邦彦(大学歴史資料館准教授)著

大阪府和泉市の観音寺山遺跡は魏志倭人伝に記された2世紀後半の「倭国乱」を実証する弥生時代の「高地性集落」といわれてきた。本書は、同遺跡の発掘調査成果と研究史の整理をもとに、高地性集落とはなにかについて論じてみた。

まずは、近年の研究から中国文献に書かれた「倭国乱」の年代と高地性集落の盛行時期が必ずしも一致しないことを示した。また、同遺跡では戦乱時にムラを守る環濠などが見られなくなっても集落が長く存続していたことがわかった。また、それ以外にも弥生時代後期に近畿地方で丘陵上集落が増えていることなどから、大規模な集住が平野だけでなく丘陵地域にも拡大することによって高地性集落が増えることがわかった。

さらに、武器などが弥生時代に増えることは、中国大陸の戦国時代の影響が日本列島におよび、実際の大規模戦闘のためというより儀礼のモチーフとしての武装がひろまったと考えた。

弥生高地性集落は様々な要素が複雑にからみあって増えた集落の形態であり、特定の「乱」だけを示すものではないだろう。逆に高地性集落論を再吟味してみることで、地域社会の発達による大規模弥生遺跡の増加や中国社会や文化の間接的影響などといった弥生時代の特徴がみえてくる。本書では、観音寺山遺跡を再論することで、こういった弥生社会の多様な側面を描こうとした。高地性集落論を借りて、弥生のムラの考古学研究の今を概説する書でもある。

著者より

思文閣出版
1,995円(税込)

八重の桜・襄の梅

新島襄を語る・別巻(三)

本井康博(元大学神学部教授)著

著者は誰しも知る新島研究家である。そして本著は同志社大学退職年のものであり最終章には、神学部での退職記念講演「新島研究50年」が収録されている。定年の年には、研究活動の締めくくりに蓄積業績をまとめ上げて、「晴れ晴れとした気持ちで大学を去りたい」(本書284頁)との願いは、八重の大河ドラマ決定と重なり大きく予定が変更され、講演依頼は従来の「二倍から三倍です」(285頁)というから、ほぼ無名であった八重の広報活動全開での定年である。これはその最近の13回講演集であり、本著は八重本6冊目になる。

口絵には八重の書「クリストの心をもて心とせよ」(明治43年2月1日)や八重所有の讃美歌がある。また少年時の新島襄(七五三太)の「四君子図」(菊、竹、蘭、梅)(218-9頁、本書カバー)の墨絵があり、これも嬉しい。本書の題名は新島学園で行われた新島生誕記念の演題である。ひとつの講演は10項目程度の話題を含んでいるため、全体で130以上の話題がある。「新島八重再入門」(第1章)の八重も寒梅(48頁)、「山本覚馬再入門」(第9章)では覚馬カトリック改宗(210~212頁)、「新島家の子孫たち」(第10章)など、どの章も襄が八重に望んだ「ハンサムに生きる」ことが熱く語られ、90歳を越えてこの生き方をする中学時代の恩師を紹介する(第11章)。同志社の使徒の一人として著者が届けてくれた嬉しい書である。

杉野徹(女子大学名誉教授)